

コラム

早慶図書館共同運用への思いと感謝

いりえ しん
入江 伸

(メディアセンター本部調査役)

2019年9月、1990年代から構想していた早慶図書館システム共同運用（以下、早慶共同運用）がはじまった。これまで努力してこられたみなさまに感謝したい。そこで、このコラムでこれまで考えてきたことを書かせていただく。

1 無事に過ごせたことに感謝

1990年くらい、某ソフトハウスに勤務していたころ、メディアセンター（以下、メディア）とは、和書遡及やHappiness（形態素解析ソフト）などで取引があり、また、気のいい業者だったため雑用を頼まれることも多く、よく出入りさせてもらっていた。何かを期待されたのか、はたまた縁があったのか、1997年1月1日に慶應義塾（以下、慶應）に就職することになった。当時はメディアの混乱期？であったためか、なぜか私の就職は学内で秘密にされていた。1997年1月6日に初出勤した時は、だれも私が就職したことを知らず、机やパソコンの用意もされておらず、タイプ台の上に鉛筆2本が乗っただけだった。あのころ、定年まで24年間を無事に過ごさせてもらえるとは思えなかったなあ。感謝・感謝。

2 振り返ると

私が慶應と取引を始めた1990年は、インターネット時代の幕開けであり、紙資料（以下、紙）から電子資料（以下、電子）へ転換する始まりであった。その流れの中で、私のメディアでの24年は、メディアで扱う媒体を紙から電子へ変えていくことだったと思っている。そのはじまりは目録遡及であり、その後には始まる版面の電子化だった。そして、いつの間にか、電子が主役の時代を迎えている。

紙と電子の両方に力を入れようとするハイブリッド図書館はその両方の図書館スキルと運用コストが必要となる。この運用コストの増加に対応するためには、紙の管理コストを削減し、電子へ振り向けていくことが必要となる。そのため、この10年の私の仕事は、紙のコストを削減し、紙と電子の管理コス

トのバランスをとることだった。電子が70%近くになった現状では、電子の管理コストを確保するため、紙の管理コストの大胆な削減を急ぐ必要がある。それは、図書館の業務モデルの変換が前提となる。早慶共同運用も紙の管理コストを効率化し、電子の安定した管理を確立していくための過程の一つだと思っている。

3 幸運な人とのつながり

私にとって幸運だったことは、仕事が人とのつながりを作り、そのつながりが仕事を支援してくれたことだ。特に、1990年からの早稲田大学図書館システム（WINE）開発への参加、2004年にはじめてライブラリーシステム研究会（Z39.50）での目録の国際化・データ交換の調査研究、Google Library Projectへの参加、iPad発売を契機とした電子学術書利用実験プロジェクト（以下、電子学術書）の推進など、それらのプロジェクトは図書館とその周辺の人たちとのつながりを広げてくれた。それぞれでのつながりが早慶共同運用へとつながってきた。また、UTLAS、RLG、OCLCや国内外の図書館との情報交換から多くのアイデアが生まれ、仕事の強みになった。

特に、電子学術書は、ディスカバリ・DDAの導入へと直接的につながる取り組みであり、学術出版社との連携は、国内における電子資料の学術書籍流通推進に貢献できたと思っている。

4 業務委託を紙から電子への流れでとらえる

1990年代後半、紙から電子への転換が始まる時期に、図書館業務の委託化が大規模に進められた。それは、図書館のシステム化や目録遡及などによるコスト増、教育改革などによるサービス要望などにより、経営側から業務再編とコストダウンが強く求められたことによる。

委託化は、結果的に業務とスキルの定型化・簡素化（マニュアル化）を進めることになった。紙か

ら電子への転換が長期的な方向であるとするれば、委託により紙管理の簡素化は評価できるが、削減したコストを、電子の業務構築へ振り向けられなかったことは大きな失策であったと強く思っている（慶應では結果的にうまく転換が進んだ気がするが）。なぜ、国内の図書館全体として、この戦略を描けなかったのだろうか。このあたりが、日本の図書館を小さくした原因なのではないかと悔やんでしまう。

電子図書館への改革は、業務を労働集約から知識集約・共同化へ構造改革し、労働集約的な紙の業務をできるだけ縮小することで実現できる。例えば、電子の目録（メタデータ）は、外部の作ったメタデータへリンクすることを中心とする知識集約的な作業であり、紙の場合は、各大学で一冊ずつ目録を作成する労働集約である。この紙の構造を電子の構造へ変化させることが電子図書館への取り組みである。

5 システムリプレイスは人材育成の場である

人材育成には、OJTが必須である。特に、業務的に成長するには、大規模な業務改革プロジェクトで鍛えられることが必要である。システムリプレイスは、そのような人材育成に極めて重要な機会であり、また、そこで育てられた世代が一定の価値観を共有するようになり、次の図書館運営の基盤になっていく。また、リプレイスでの業務改革の達成は、リーダーとしての意識を高めることになる。定常業務ではないマネジメント経験をできることも有意義だろう。リプレイスで活躍してきた担当者が、管理職になり活躍しているのは、その実例である。

今になって思えば、システムリプレイスは、プロジェクトが成功することよりも人材が育成され次の世代が形成され、繋がっていくことのほうが重要だったような気がする。

6 早慶共同運用の発想

早慶共同運用の検討に入る前に、次のシステムリプレイスに向けて何を目的にするか考えていた。その時、慶應だけでリプレイスした時の目標を見出すことができなかった。紙から電子へ本格的に移行するためのモデルは、紙の共同保存が目的の一つになるため、大学の枠を超えることが重要であるという思いが強くなった。それらを考えた時、共同運用の相手は早稲田大学しか想定できなかった。早稲田と

の共同運用を目標と考え、加えて、目録を一本化し効率的に国際連携を進めるということを早慶共同運用の目標と考えた。

2015年、共同運用に向けて、慶應の田村所長と早稲田の深澤館長に懇談していただき、両校とも同じ思いであったことが確認され、その場で基本的に合意することができた。それに加えて、目録業務の統合とコストダウンを目標とすることも合意された。この合意から実際に稼働するまで5年間が必要だったが、その半分の期間は、相互理解を深めていく時間だった。

7 よけいな一言

最後に気になっていることを一言。

■できないことはできないと言おう

メディアに来て、「図書館員はできないと言っただけはいけない」と言われたことがあった。たしかに図書館の人はできないことをみとめたがらない。でも、挑戦は、できないことを認め、それを分析するところからはじまる。

一番いけないのは、できていないのにできているかのような作文を書くことだ。

■データの長期保存を進めよう

電子化の仕事をする時、電子化したデータの長期保存の考え方を以下のようにまとめた。「メディアで電子化するものは、所蔵資料が対象なのだから、電子化したファイルが読めなくなったら、再度電子化をすればいい。そのため、紙の保存を電子化の基盤とする。」

その後、データが増えたため、ストレージの増強を進め、数回のマイグレーションを経験した。最近では、長期保存のためには、長期的に維持される組織がデータを保存することが必要だと思っている。マイグレーションやハードウェアの維持も必要だが、重要なことは電子化したコンテンツを理解していることである。電子図書館の書庫はストレージである。これからは、メディアもデータの長期保存に積極的に関わっていく必要があるのではないだろうか。

みなさん ありがとうございます。